

日本科学者会議
京都支部ニュース 6月号 No.460

2022年6月13日発行

〒604-0931 京都市中京区二条通寺町東入榎木町 95-3 延寿堂南館 3階

Tel/Fax : 075-256-3132

E-mail : jsa-kbranch3132@mbox.kyoto-inet.or.jp

URL : <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/jsa-k/>

ゆうちょ銀行振替口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：01050-6-18166

ゆうちょ銀行総合口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：14480-2800181

上記総合口座を他金融機関からの会費振り込みの受取口座として利用される場合は以下の内容を指定して下さい。

店名：四四八（読み ヨンヨンハチ） 店番：448 預金種目：普通預金 口座番号：0280018

目次

- ・第3回 京都支部市民講座「高エネルギー物理学の最前線」……………2
- ・2022年度 京都支部幹事会からのご挨拶（前田耕治）……………3
- ・京都支部第56回定期大会報告（左近拓男）……………4
- ・定期大会議案（I）の一部訂正（再掲）……………6
- ・寄稿：支部会員からの提言（志岐常正）……………6
- ・寄稿：3階にある支部事務所への階段（細川 孝）……………7
- ・第53回定期大会（1日目）報告（前田耕治）……………8
- ・『日本の科学者』読書会5月例会（5/25）の報告「4月号特集」……………9
- ・寄稿：読書会「不安定雇用の女性研究者」感想（近藤真理子）……………12
- ・支部主催行事案内……………13
- ・支部幹事会だより……………13

<今年度会費の早期納入のお願い>

4月に送付した会誌に、2022年度会費の請求書（郵便振替用紙）を同封しています。そこに記載の金額が請求額になります。この郵便振替用紙を使って納入をお願いいたします。過年度の未納会費がある方は、その分も請求させていただいております。なお、全国本部への会費納入は、月ごとに登録支部会員全員の本部会費を、その月までの既納入者の会費で納入していますので、早期に会費納入がないとやり繰りが大変なこととなります。今年度会費の早期納入にご協力くださるよう切にお願い申し上げます。（支部財政担当・細川）

第3回 京都支部市民講座「高エネルギー物理学の最前線」

期日：6月19日（日）14時～16時10分

坂本 宏 氏 講演 14:00～15:00

休憩 10分

政宗貞男 氏 講演 15:10～16:10

「世界最大の加速器 LHC による素粒子物理研究の最前線」

坂本 宏 氏（東京大学名誉教授）

概要：世界最大の加速器 LHC はジュネーブ郊外にスイスとフランスの国境をまたいで建設され、2009年に本格実験を開始、2012年には素粒子標準理論で唯一未発見の粒子ヒッグス粒子を発見した。そこで行われる ATLAS 実験は世界 42 カ国から 3 千人を超える研究者が参加し、四半世紀にわたって建設と運転を続けてきた。本講演では素粒子物理の課題と LHC 加速器の果たす役割、新粒子発見の過程を解説する。また、世界中の研究機関が協力する巨大科学プロジェクトの経験を通して、今後の自然科学のあり方についても議論する。

「核融合エネルギー研究と ITER 装置」

政宗貞男 氏（中部大学教授・京都工芸繊維大学名誉教授）

概要：2035年の核融合実験開始を目指して、国際熱核融合実験炉（ITER）が南フランスのカダラッシュに建設中である。ITERでは核融合出力エネルギーと入力エネルギーの比が5以上の定常運転の実現を目標としている。講演では核融合反応を利用したエネルギー取り出しの原理、核融合反応を維持するためのプラズマ閉じ込め研究、核融合炉の概要と ITER 装置、について述べる。

- ・ ZOOM 情報は支部主催行事欄（13 頁）に掲載しています。
- ・ 出入り自由ですが、参加ご希望の方は京都支部幹事会（メールアドレスは表紙に掲載）までお知らせ頂ければ幸いです。
- ・ なお、対面でのご参加を希望される方は、キャンパスプラザ京都（6階 龍谷大学サテライト教室）にお越しください。報告はオンラインのものもあります。この件に関する連絡先は細川孝（支部幹事、080（3783）7274）になります。

2022年度 京都支部幹事会からのご挨拶

代表幹事 前田耕治

2022年度の京都支部定期大会を受けた第1回支部幹事会で引き続き代表幹事に就きました京都工芸繊維大学の前田です。大会でも発言しましたが、京都支部の課題と現状について簡単に説明させていただきます。

第1に、会員拡大と組織強化です。新しい現役会員や学生会員を迎えつつもそれを上回る退会者があり、残念ながら、現時点で200名の大台を切り、昨年同時点より減らしています。現役引退後の退会防止について半額会費の適用もすすめているところですが、高齢会員の退会が続いています。

志岐常正氏からは、定期大会に際して、別頁に掲載のように、会員拡大につながる積極的提案をいただきました。コロナ禍や大学分会の停滞もあり、大学内での活動の足掛かりが失われているなかで、どのように学生や若い研究者との結び付きを作るか、まだまだ模索中ですが、ご意見を参考に工夫を凝らしたいと存じます。

現時点では、昨年より新しく始めた京都支部主催の「市民講座」（6月に3回目を開催）で大学人や市民とのコンタクトを増やし、また、長く続いている『日本の科学者』の読書会へのゲスト参加などを通じて、会員拡大の手がかりを作りたいと考えています。

第2の課題は、京都支部のポテンシャルを引き上げることです。支部会員がそれぞれの専門を生かして、何らかの形でJSAの活動に加わる機会を増やして、会員拡大に良い循環を作りたいと考えています。関連して、ある会員より、支部幹事会と会員をつなぐ「メーリングリスト」の提案をいただきました。その点については、幹事会でも昨年からの検討していたところです。ただ、メールアドレスの把握が一部にとどまっていたり、技術的なところで手詰まりとなっていますので、引き続き検討させていただきます。当面は、メールや支部ニュースを通じた情報の発信と寄稿を中心に日常的な双方向のやり取りを増やしたいと存じます。

最後の課題として、活動の中心となる支部幹事会の安定的運営と世代交代があります。昨年からは、現役会員が代表幹事、事務局長（左近拓男氏）、会計担当（細川孝氏）を担うようになりましたが、現役世代の多忙さも増して、いまだに、高齢の幹事・会員の方々に、読書会の世話、ホームページの更新、会誌発送作業など大変な負担を担っていただいています。そこで、まだまだ余力のあるリタイアまもないシニア会員の協力を得たいと思います。今大会でもそのような立候補をいただきました。さらに、若手、女性など、幹事会の中にもダイバーシティを拡げたいと存じます。

情勢的には、4月に大会議案をお送りして以降も、ウクライナ危機の継続、憲法改悪の問題、学問の自由と大学の自治を脅かす「国際卓越大学法案」の成立、数千人規模での雇止め問題など、種々の情勢の急展開が進んでいます。ウクライナへのロシア侵攻とそれへの抵抗については様々な視点が交錯します。大会でも提案されたように、まずはベテラン会員を囲んでの懇談

会的なものから始めて、いいきっかけになればと思います。

最後になります。2021年度いっばいで長年の支部幹事の役を降りられた、鈴木博之氏と上野鉄男氏の両名に幹事会を代表して心より感謝の意を表します。長い間のご奮闘、有難うございました。引き続き、一会員として京都支部を支えていただければと存じます。

京都支部第 56 回定期大会報告

事務局長 左近拓男

日本科学者会議京都支部第 56 回定期大会は 2022 年 5 月 22 日（日）13:00～15:00 に ZOOM（オンライン）で開催されました。

次第

代表幹事挨拶（前田代表幹事）

大会成立の確認（幹事会）

議長選出

議案 I（活動報告・方針）（左近事務局長）・審議・採決

議案 II（会計報告・予算）（細川会計幹事）・審議・採決

議案 III（支部細則改正）・審議・採決

次期支部幹事の承認

次期会計監査委員の承認

全国定期大会の京都支部代議員の承認（前田・近藤）

大会への参加者 21 名、欠席者（委任状）89 名 合計 110 名であり、参加者と委任状提出者の人数は会員数 199 名の過半数を超えているので大会は成立しました。

議長には参加者の互選で大倉会員が選出されました。

議案書 I についての議論では、1 件訂正意見が出され、幹事会で確認のあと、訂正されました。

議案書 I p. 2 上から 2 行目：訂正前 日本国民 1 人当たりの排出量は米国、ロシアに次ぎ、世界で 3 番目に多く、...

訂正後：日本国民 1 人当たりの排出量は世界で 4 番目に多く、...

大会の審議の中で出された情報や意見を以下に挙げます。

(1)自然科学懇談会が休会となっているので再開を望みます。

(2)理研では 10 年雇用問題が本格化している。

(3)支部として企画をたくさん行ってください。座談会や学習会形式で行ってください。当面の課題としてウクライナ戦争や憲法改正の問題があります。

(4)竹中幹事（近畿地区選出全国幹事）から 5/21 の全国幹事会の報告がありました。若手の院生や研究者の活動の活性化が急務。大学を取り巻く問題として、大学ファンド、卓越大学

や経済安全保障法の問題がある。経済安全保障法は、従来保証されていた企業の経済活動の自由を阻むことになる。また大学の研究の自由の制限となり、日本の研究のさらなる後退が危ぶまれる。

支部幹事ならびに会計監査について承認されました。（敬称略）

京都支部幹事

瀬名波栄志	大倉弘之
近藤真理子	坂本宏
左近拓男	清水民子
末満英俊	菅原建二
竹中寛治	細川 孝
前田耕治	

会計監査委員

麻生 潤

支部選出の全国定期大会代議員（定員 2 名）が選出されました。

全国定期大会代議員

近藤真理子
前田耕治

大会終了後、2022 年度京都支部第 1 回幹事会が開催され、以下のように決まりました。

代表幹事	前田
事務局長	左近
会計	細川
全国幹事	竹中
JJS 編集委員	近藤

幹事会での、大会開催後の意見です。

- ・大会の前に講演会・学習会を行えばよかった。
- ・支部大会決議が出せなかったので今後の大会では出していきたい。
- ・支部幹事の交代がなされた。今後も支部の担い手を増やして活動を活性化させる。
- ・各研究会がどうなっているか、活動状況や京都支部とのつながりはどうなっているか確認する。

定期大会議案（Ⅰ）の一部訂正（再掲）

4月12日発行の支部ニュースに同封した議案（Ⅰ）の一部を訂正します。

p. 5, 下から12行目

(誤) 原発問題研究会 (世話人：大倉弘之)：「原発事故による甲状腺被ばくの真相を明らかにする会」を中心に活動を行なった。

(正) 原発事故による甲状腺被ばくの真相を明らかにする会 (報告：大倉弘之氏)：

p. 6, 上から2行目

(誤) 731を考える会 (世話人：福島知子)

(正) 731 学位授与の検証を求める会 (事務局：福島知子氏)

上記のように訂正したうえで、当該の二つの会は、JSA 京都支部や代表幹事が会員として参加しているわけではなく、支部会員を通じた協力関係にあるので、「(6) 分会活動」の項から「(10) 社会活動」の項に移すことにした。

寄稿：

支部会員からの提言

志岐常正

京都支部定期大会にあわせて、志岐会員から提言を承りましたので、掲載させていただきます。

A：会員の漸減は、最近の多くの組織（普通の学会を含む）に共通の要因によるだけでなく、科学者会義の創立以来の体質的なものです。根本的な検討をしなければ、これは改まりません。ともかく特別委員会を設けてはどうでしょうか。

B：私が“何をするのも「拡大」を目的とする”というのは、“たまたま新しく参加した人に加人を呼びかける”といった程度のことではなく、たとえばシンポや現地見学などの統一課題やスピーチの主テーマ（あるいはサブテーマ）などにそのための工夫を反映させるということです。

そのためには、まず若い人達の（研究・学習上の）要求が何かを聴き、それに応える活

動を組むように努力せねばなりません。若手委員会の人達自身の科学者としての成長・成功したいという思いに出発することが要諦です。

C：科学者会義は、研究をする組織でもありますが、いつの間にか忘れられているようです。研究をするにしても、社会的発言をするためだけに矮小化されています。それなら、たとえば宇宙論の専門家は、会に入る必要を感じなくて当然です。この点、今度の大阪総合シンポでは、一層顕著になりました。大阪の風土に関係するのかも知れません。

D：逆に、今の科学者の社会的責任も、もうひとつ明確にされていませんね。戦争と平和、

とくに、アジアと日本の戦争と平和に関する分析が、支部だけでなく、全国的にも、一面的だったり形而上学的だったりだと感じます。

「総学」ではどうなるでしょうか。軍事問題の検討を抜いて侵略問題や戦争防止問題に

ついて論陣を張っても、日本を含む各国の戦争屋どもには何も影響を与えられないでしょう。戦争や軍隊の経験者がほとんどいないのですから、是非もないかも知れません（証言ならします）。

寄稿： 3階にある支部事務所への階段

細川 孝

ご存じでない会員もおられるかもしれないが、京都支部の事務所は市役所近くのビルの3階にある。コロナ禍のもとで幹事会はオンラインで開催されるようになっていて、会誌の発送作業は事務所で行われている。月に一度は、この階段を上り、封入作業終えた封筒を近くの郵便局にまで持ち込むために階段を下ることになる。そして、また階段を上るので、必ず2回は上り下りする。

わたしは授業があったりして年に数回しか発送作業に参加できていないが、数人の幹事の方はほぼ毎月、この作業に参加されている。そのほとんどが、80歳代の方である。わたしなどはつい最近60歳になったばかりであるが、「若手」にとってもけっこう急な階段の上り下りは楽とは言えない。「支部ニュース」も毎月、編集・印刷し、同封して会員に届けられているが、これも高齢の幹事が中心になって担ってくださっている。

このような京都支部の活動を長年にわたって支え続けてくださった上野鉄男さんと鈴木博之さんが、先に開催された支部大会をもって退任された。上野さんは支部大会でもご挨拶をされたが、鈴木さんは大会へのご参加はかなわなかった。紙面を借りて、京都支部の一員として改めて感謝申し上げたい。

冒頭で「階段」のことを記したのは、幹事を継続はしてくださったが、階段の上り下りが大変になっているとの発言が強く印象に残っているからだ。わたし自身も高齢の会員にとって過酷なことと感じていた。今年度に入ってから、代表幹事の前田耕治さんの研究室の大学院生がアルバイトとして、郵便局への搬入作業を手伝ってくれている。少しは負担軽減になっているだろうが、長期的な展望を考えるとまだまだだ。

昨年度は支部の会員数は大きく減少した。そのことにも会員の高齢化が影響している。同時に、退会の理由には、日本科学者会議のありように対する疑問や違和感があるのではないかと思っている。わたし自身も同様である。しかし、京都支部と幹事会が集団的な協力で培ってきたものを簡単に壊すわけにもいかないと感じている。

大学院入学とともに入会したので、ちょうど30年が経過した。まじめな会員ではないが、幹事も結構長く続けている。幹事会の高齢化を目の当たりにして、「足を洗えない」というのが正直なところである。これも一つの道かと諦めつつあるが、あの「階段」が上り下りできなくなった際には潮時と思っている。

第 53 回定期大会（1 日目）報告

支部代議員 前田耕治

全国の支部の代議員が集まる定期大会は、今年もオンライン開催となり、5月28日に1日目の日程が進められ、6月12日に2日目の日程が予定されている。京都支部からは、代議員として近藤さんと前田が、全国幹事として竹中さんが出席した。1日目の議長は東京支部選出の代議員が務めた。なお、2日目の議長は京都支部の近藤代議員が務める予定である。両名の議長とも女性であるのは画期的かもしれない。昨年は、議案提出側の全国事務局が議長を務める異例の進行であったが、今回は規則通り代議員から議長が選ばれた点は改善された。しかし、事務局側のオンライントラブルにより開会が20分遅れた点や膨大な議案文書の送付が大会直前であった点は改善の余地がある。

冒頭に、山本富士夫代表幹事の挨拶があった。同氏も事務局の資料配付が直前すぎて目が通せないことに苦言を呈した。ウクライナ問題については、バイアスがかかった報道が目立ち、科学的根拠に立脚すべきと述べ、まずは停戦に向けて非武装、非暴力、非核が大事であり、国内世論も科学的に喚起すべきと述べた。攻撃対象となった原発も非核の対象であると指摘した。

1日目の主な議事は、57期活動報告・討議、58期活動方針の報告・討議、大会決議案の提案であった。活動報告は若干の字句修正のうえ、全会一致の賛成で採決されたが、活動方針の採決は、修正案を再提案することとなり、2日目に持ち越された。

57期活動報告については、研究企画部から

の報告では、会員減にかかわらず研究活動(研究助成、研究委員会)は活発であり、新しい研究委員会2件(社会的引きこもり、新型コロナウイルス感染症)の設立が提案され、全会一致で承認された。

学術体制部からは、問題別委員会についてJSAとして決議などをあげるときに提案を受ける委員会との説明があったが、その点での具体的な実績は乏しいように感じられた。

討議で出された主な意見を示す。議論になったのは、『日本の科学者』(JJS)を電子化してほしいという意見であった。この意見は、とくに会員への会誌の配付が困難になっている支部から全国からの発送という要望ともに出され、また、若い世代の会員を獲得するには電子化の方が有効ではないかという意見もあった。これらの意見に対して、長野編集委員長は、「会員とのつながりがなくなるので反対」という支部(京都支部を名指し)もあり、財政的にも電子化で改善される余地も小さいと述べ、電子化には反対の立場を述べた。

その他に、ある代議員から、事務局の資料をもとに、会員は指数関数的ではなく、年ごとに直線的に減少しており、このままでは10年後に本会は崩壊すると指摘した。

滞納会員分が支部会計を圧迫しているという北海道支部の代議員の発言に対して、全国事務局は「初めて知った。実態調査を行う」と回答したが、除籍、休会など滞納会員に対する扱いを統一して定めるべきではないかと感じた。

京都支部の活動については、私から、会員拡大が喫緊の課題であり、そのための方策として、市民講座や読書会の活性化、また、反核ネットワークの「戦争展」を通じた学生のコンタクトについて発言した。

58期活動方針については、会員名簿の整備・管理については検討を継続するが、専門家の情報提供のために有益であるとの説明があった。引き続いてJJSについて議論があった。編集委員長は5年ぶりに交代の意向が述べられたが、委員長への業務の集中の改善が必要との認識が述べられた。JJSの編集方針として、読むに値する雑誌、売るに値する雑誌との方針が強調された。読者拡大のために学生向けの記事を掲載してはどうかとの意見に対しては、市民が理解できない記事は載せないとの回答で、「売るに値する雑誌」が強調された。

困難支部からの発言もあり、鹿児島支部では、現役会員が事務局長を引き受けられない状況に対して、幹事で仕事を分担することで、逆に支部内に広がりが出てきたとの前向きの発言があった。佐賀支部では、少数の会員であるが、全国のオンライン企画を支部ニュースで紹介して参加を促している。愛知支部の代議員からは、全国の会員が専門を生かして大学院生の研究をサポートする「バーチャル大学院」のようなものを作れないかという提案があった。文科省の許認可は不要であり、退職者の活躍の場となるというメリットが述

べられ、賛同の意見も寄せられた。

活動方針については、24総学と原水爆禁止世界大会科学者集会に関する加筆、国際卓越研究大学に対する言及について、修正提案があり、事務局から修正案を改めて提案することになり、議事進行を変更し、2日目に採決することになった。

大会決議案は2件が提案された。一つは、宮城支部提案の「ウクライナにおける戦闘の無条件即時停止 (Unconditional Immediate Stop of Battle in Ukraine) を訴えます」。もう一つは、滋賀支部提案の「学問の自由と大学の自治を破壊する経済安保法と国際卓越研究大学法を廃止せよ!」である。ウクライナ関連の決議は、京都支部幹事会でも検討したが、着眼点の複雑さのため時間切れで断念した経緯がある。宮城支部の決議は、ロシア軍・ウクライナ軍の双方に無条件の停戦を求める簡潔なもので、歴史的経緯や政治的背景に触れない点で合意は可能ではないかと感じる。

議事の最後に、役員立候補の説明に移り、事務局が選挙管理委員である大分支部の代議員に説明を求めたが、その代議員は「何も聞いていない」と断ったのには啞然とした。結局、事務局の増澤氏が説明したが、昨年京都支部選出の選管委員が全国事務局の民主的運営に不満を抱いた経緯もあり、私から「結局、去年の教訓が生きていない。2日目に向けて正してほしい」と述べさせていただいた。

『日本の科学者』読書会5月例会(5/25)の報告

4月号 特集：不安定雇用の女性研究者

—研究をめぐるジェンダー問題

標記例会が5月25日(水)15時30分より17時30分までZOOMを用いて行われた。参加者10名(女性7名)。特集より4篇の論文が取り上げられた。

朴木佳穂留「女性研究者をめぐる今日の課題」
(報告：清水民子)

日本の女性研究者数(15万8900人;比率16.9%)は少なく、職階による男女差、大学設置者種別、専門分野による男女差も大きい。

女性研究者問題の顕在化は1960年代、草の根運動として始まり、1975年国際女性(婦人)年を期して日本科学者会議が1974年婦人研究者問題専門委員会、全国シンポジウム開催、学術会議が1975年婦人研究者問題小委員会設置、調査実施、1981年初の女性会員選出などの動きを経て、2000年代に国の政策として女性研究者支援事業が始まったが、数値目標は未達成である。

課題と展望として、女性のライフイベントに焦点を当てた現在の支援事業から①教育や学術におけるジェンダー問題としての包括的施策、②男女ともに「ケアワークありの働き方モデル」へ、③公正な競争、④研究職に魅力を、と述べている。

JSA 女性研究者・技術者調査チーム「『不安定雇用の女性研究者の実情に関する質的調査』の方法および結果の概要」(報告：清水民子)

研究協力者(調査対象)はスノーボーリング方式により依頼され、半構造化インタビュー11項目にもとづき、深層インタビューをおこなった。本号の各論文の分析対象者は24名、表1(p.14)に一覧。現在の状況は正規職5、任期付き10、RPD・PD3、非常勤6名となっている。

衣川清子「非常勤講師の場合—経済的状況、メリット・デメリット」(報告：福島知子)

パートタイム労働者である非常勤講師は、専任教員数よりはるかに多く雇われ、担当する講義数も大学全体の過半数を占めるが、正確な数や実態を示す統計は無い。私立大学の非常勤講師は、男性7割、女性3割程度であるが、本務校を持たない女性非常勤講師は42.7%と紹介されている(『高学歴女子の貧困』大理奈穂子他2014光文社)。非常勤講師問題は女性問題であり構造的問題である。

非常勤講師は、①専業非常勤講師(非常勤講師の仕事だけ行っているもの)と②兼業非常勤講師(他の職があるもの)の二つに分けられる。その経済的状況は、①専業非常勤講師の場合、非常勤講師給のみでの生活は苦しい。コマ数を増やすと授業準備と付帯業務が大きくなり、研究や家事育児に割く時間が圧迫されるので増やせない。②兼業非常勤講師は、非常勤講師給は補助的。求人サイトに出された専任教員募集要項によると、非常勤講師より安価な有期の専任教員が求められ、非常勤講師を減らそうとする動きも増える。専任教員の定年退職後後任を雇い入れず、任期付き若手教員を数名採用する慣行もある。

専業非常勤講師のメリットは、生活スタイルに合わせ、やりがいを感じられる仕事ができること。デメリットは、不安定性と低賃金。無期転換阻止のため雇い止めにしたたり、半年間のクーリング期間を入れさせるなどの違法な対応があったが、労働組合の介入により減少している。研究環境がないこと。研究を続けたくてもできない状況に追い込まれる非正規研究者は多いであろう。

兼業非常勤講師のメリットは、研究のネットワークが広がることと、本務校の制約から離れて研究ができる可能性があること。デメ

リットは、兼業であっても経済的に不安定であることと、産休や子育てとの両立の難しさ（女性のライフサイクルと関わる雇用不安定性）がある。

「改正労働契約法（2013/4）」により新規非常勤講師の任期の付与の問題がある。2013/4以前から勤めている非常勤講師は、ほぼ2019年度以降からの無期契約への転換を果たした。一部の大学は、非常勤講師の無期転換ができないよう就業規則に明記。また非常勤講師は労働者ではないとする大学も一部にある。

勤務が継続して5年を超えると恒常的な業務とみなし、無期契約に転換できるようにする。給与引き上げ、均衡・均等待遇に見合う諸手当支給、共済制度勧誘促進が次の努力目標となる。

コロナウイルス禍による渡航制限で留学生が来日できなくなり学生数が減少。非常勤講師の雇用を左右する問題が発生した。減収があった非常勤講師は、申請すれば「新型コロナウイルス感染症対応休業支援金・給付金」が給付されることになっているものの、教育機関によっては、申請をした非常勤講師を雇い止めにした事例があった。自宅からのオンライン授業の配信やオンデマンド教材作成の環境整備に出費するも、その費用が払われないことや、大学によって異なる学内学習支援システムに対応するため複数方式に慣れなければならないという非常勤講師特有の困難が明らかになった。

【感想】 研究者が任期を気にせず研究に没頭できる環境がなければ、日本の研究力の発展は妨げられてしまう。任期のない正規雇用の研究者の増員が必要と思う。また「稼げる大学」法案（国際卓越研究大学法案）に抗議したい。

斎藤悦子「女性研究者の家庭生活—年齢別、世帯別の分析」（報告：瓜生淑子、同志社大）

私自身、専任のポストを得たのは、90年代の42歳になってからであった。当時は、就職は指導教員の思召しに期待するしかなかった。それに比し、今は公募情報もWebからも得られ、多様なポストも用意されるようになった。しかし、「改定労働契約法」の下、勤続10年を超えた研究者の無期雇用転換が始まる来年4月を目前にして、国立大学・国立研究機関だけでも非正規雇用の4500人がその直前にも雇止め合う可能性があるなど、大きな問題になっている。（非正規問題はとくに国立機関で進んでいる。今国会の文科省の役人の答弁では、「国立大学の研究力低下が私立のそれに比し顕著かどうかについては、論文数に対する重回帰分析などによって客観的に示されるまでは何とも言えない」とのことだが）。

そんな中で企画された読書会に参加し、「女性研究者の家庭生活」の章を分担報告した。「仕事」か「生活」かというWLBの問題は、とくに女性には未だ大きく立ちはだかる問題だ。不安定雇用という立場ではライフサイクル展望だけでなく、研究テーマの展望・計画自体も持ちにくくなる。とくに20代・30代がおかれる状況が深刻だ。しかし、続く世代も、受けた支援の負担感や単身者のWLBへの配慮がないなど、悩みはつきない（調査で50・60代の常勤者の話が聞けていないのは残念!!）。

一方、研究という職業は、大なり小なり、正規のポストを得るまでは苦労や不安が高いことが共通項としてあり、後輩の苦労にも思いを馳せやすい職場だということも、引用文

献 (大塚隆志他, 2019, 「我が国における女性研究者支援の在り方について」)にある先輩研究者の記述内容からもうかがえた。読書会のフロアからも「出産・育児に携わる場合は、任期の10年を延長できる規程を作った」などの事例も紹介された。

本論文でも「先輩研究者の何気ないアドバイスがあったからこそ研究を続けられた」と

いう語りもあった。「不安」を「希望」につながるよう、研究者養成教育の早い段階で、こうした幅広いノウハウにまで触れられるような機会・教育が提供される必要も感じさせられた(もちろん、科学技術・大学の情勢・政策の現状と課題についてきちんと触れられることが大前提だが)。

寄稿： 読書会「不安定雇用の女性研究者」感想 近藤真理子

今回の読書会で論文を踏まえつつも多くの方のご意見をうかがうことができ、改めて女性研究者の処遇について考えさせられた機会であった。子どもを抱えて仕事と両立をするには非常勤がよいように思っていた10数年前、忙しくて本を読んだり、学会に出るなんて考えられなかった。それはそれで正しいと思っていけれど、長い目で人生を見た時、時間も必要だったけれど、お金もキャリアも必要だったと心から思う。当時は子どももいるし、研究職を取りに行かなくてもいいのではないかとまで思っていた。

大学院時代に先に結婚して出産をして、きちんとライフプランを立てておられる方には尊敬しかない。

現在任期付きとは言え、専任になった。多少の研究費も出る、研究室もある。だけれど、もっと早く、非正規を脱出できていたら、その年相応の出会いや仕事もあっただろうと思う。

不安定雇用で、学会やつながりが持てない人も多くおられると思う。実際、私は不安定

雇用される中で、学会費や本代は最低限に抑えていた。ジャーナルは立ち読みをするもので、年間購読をして、活動をするなんて考えられなかった。非常勤を2つ朝と昼で掛け持ちをしたり、家庭教師などと掛け持ちをしていて、講義を終えると走って非常勤控室を出ないといけなかった中で、私の場合得ることのできる情報量も限られていた。ネットワークを各大学の非常勤に通う中で持てるという声も間違いではないし、今思えば非常勤控室での出会いも少なくはないが限界もあった。

非正規を大量に雇用をして、使い捨てるような扱いをするのではなくて、きちんとした専任のポストになるように大学当局も意識をもって、その中でサポートがしあえる関係、環境づくりが急務である。スタッフの足らずを非常勤の大量雇用ではなくて、より多くの研究者が大学に居て、議論や研究をすることができる場とすることで、学生も、細切れでなく、じっくり膝を交えて深まりのある議論ができる。後進を育て、より豊かな教養人を育て生ることにつながるのではないかと思う。

支部主催行事案内

1. 第3回市民講座 (ZOOM)

坂本宏氏：素粒子物理学，政宗貞男氏：核融合

6月19日（日）14:00～16:10

坂本 14:00～15:00

休憩 10分

政宗 15:10～16:10

<https://us06web.zoom.us/j/84636869536?pwd=MG5ocHhzUHJDem94MklTMHZ4WDNO UT09>

ミーティング ID: 846 3686 9536

パスコード: 456936

2. 6月読書会 (ZOOM)

日時：6月20日（月）15:30～17:30

内容：JJS5月号「地域に生きる」

<https://us06web.zoom.us/j/88608038828?pwd=aCtTbWxMMTF4NjJGc3RwcFlYd2t4UT09>

ミーティング ID: 886 0803 8828

パスコード: 381106

◆◆◆◆ 支部幹事会だより ◆◆◆◆

1. 会員の現況 (6月1日)

一般会員：	182	
特別会費会員：	2	
家族割り特別会費会員：	3	
若手会員：	12	※大会の承認で一本化.
会員合計：	199人	
読者：	3	

2. 会費納入状況 (6月1日現在)

2022年度納入者：一般 109/182, 特別 0/2, 家族 3/3, 若手 2/12

2021年度納入者：一般 13 (▲3), 若手 4, 若手特別 1 (▲1)

2020年度・2021年度未納者 (休会者)：一般 2人, 若手特別 1人

3. 会計報告 2022年5月決算

<u>2022年度累計</u>		<u>2022年5月決算</u>	
収入累計	1,801,246 円	5月収入合計	751,386 円
<u>支出累計</u>	<u>601,858 円</u>	<u>5月支出合計</u>	<u>385,093 円</u>
収支累計	1,199,388 円	5月分収支	366,293 円
<u>前年度繰越金</u>	<u>213,278 円</u>	<u>前月繰越金</u>	<u>1,046,373 円</u>
5月末残高	1,412,666 円	5月末残高	1,412,666 円